大塩正路『張弛軒雑録』
——真壁（現茨城県）・栗橋（現埼玉県）の文学者雑記——

福田安典

古人書を読に必ず書中の語を抄録す　部分左之如し
確言　事実　譬喩　儁語　天文　地理　兵法　貨財　雑事
已上九ツ

日本女子大学所蔵の大塩正路の随筆『張弛軒雑録』には右の一条がある。古人に仮託しているが、この抄書の方法はそのまま大塩正路の姿勢であって、彼は生涯の読書から右の「九ツ」を抄録し、また自身の見聞や感懐を加えた大部の書を著した。それが『張弛軒雑録』十五巻である（本稿では引用に際し、原文に句読点を施し、用字を一部改めている【図版1】）。

まず書誌を記す。半紙本、写本で十五巻五冊（各冊三巻）。茶色表紙で、原題簽（書、貼、左上、子持ち枠）。概ね年代順に記事が並んでいる。文政四年（一八二一）あたりの記事が早期のもので、明治二十四年が晩期のものである。全六二九条、大部のもので話題も多岐にわたっている。早くに散逸したようだが、このたび偶然にも複数の古書肆から出たものを購ったところ完本として揃った。蔵書印は丁巻に「待賈菴」とある。

1　作者について

作者は大塩正路、藤原氏、字は義卿、坦齋や双峰、張弛軒と号した。『張弛軒詠草』には「常陸　藤原正路」とある。『笠間市史』上巻（平成五年）には、

牧野家重臣大塩氏の二男大塩正路義卿は、双峰と号し、張弛軒と称した。時習館で学んだのち、京都に行き、頼山陽、中島棕隠、荒井鳴門等に学び、のち真壁町で儒学や漢詩・和歌を指導した。没後『張弛軒遺稿』という漢詩と和歌をまとめた本が門人によって発行されている。

とあるのみであるが、詳しい伝記は明治四一年に門人によって真壁町田

（現桜川市）に建立された墓碑に詳しい（寄付者配布用の拓本縮小印刷が埼玉県文書館に現存）。墓碑は正路の墓とともに真壁町に現存している。

正路は明治二十六年一月三日に八十六で没した。そのことは『張弛軒雑録』にも「予は文化戊辰の生れなるか」（癸巻）とあり、「実に明治廿四年七月十八日　旧六月十三日　也。予八十四歳なるが」（辰巻）とあるので、文化五年（一八〇八）生まれで激動の幕末を生き抜き、明治二十四年（一八九一）まで健筆で、『張弛軒雑録』には彼の十三歳頃から八十四歳までの約七十年間の抄書が載っていることになる。歴史資料としても貴重であろう。

墓碑には、

少入時習館、修文武弓馬術、極蘊奥。弱冠遊京攝、就頼山陽・中島棕隠・荒井鳴門。研究経史・詩文業大進去。仕輪王寺法親王、弘化三年武蔵埼玉郡琴寄村小林正平聞先生博学多才、以禮聘先生。先生赴琴寄下惟論尊王明文、説文武忠孝、以経史・詩文・和歌・俳諧・書法、教授于門生。遠近来学者数百人。

（少くして時習館（笠間藩の藩校）に入り、文武弓馬術を修めて蘊奥を極む。弱冠にして京攝に遊び、頼山陽・中島棕隠・荒井鳴門に就く。経史を研究し詩文業大いに進みて去る。輪王寺法親王に仕え、弘化三年、武蔵埼玉郡琴寄村小林正平、先生の博学多才を聞き、礼を以て先生を聘す。先生、琴寄下に赴き惟だ尊王明文を論じ、文武忠孝を説き、経史・詩文・和歌・俳諧・書法を以て門生に教授す。遠近より来学する者数百人。）

笠間藩の時習館で文武を極めた後に上方で頼山陽、中島棕隠、荒井鳴門に就いたという。ただし『張弛軒雑録』には頼山陽・三樹三郎の記事は多く見えるが中島棕隠と荒井鳴門の記事はない。その後輪王寺法親王に仕え、弘化三年に埼玉郡琴寄村の小林正平の求めに応じて琴寄村に住み門生数百人を教えた。武道はもちろん、経史・詩文・和歌・俳諧・書法に明るかったという。久喜市弘道軒川島兵庫が正路に兵学を学んだことを久喜市教育委員会文化財保護課よりご教示いただいた。更に碑文を見てみる。

安政二年移隣邑伊坂。明治五年転常陸真壁郡真壁町。多年教化各郷士民其効尤大也。夙抱尊皇大義與慷慨士議事矣。屢因浦和縣九山参事請講論猛。人以為榮。有詩集十四巻國和六巻未脱稿尚多。先生性行端正頗有気概。善詩文長和歌能俳諧、識書画、鑑刀劔。晩年卜居東京牛込。

（安政二年、隣邑伊坂に移る。明治五年、常陸真壁郡真壁町に転じる。多年、各郷士民を教化し其の効尤も大なり。夙に尊皇大義を抱き慷慨の士と事を議す。屢々浦和縣九山参事の請に因りて論猛（論語とも孟子）を講ず。人以て榮となす。詩集十四巻・國和（和歌集）六巻あり。未だ脱稿せざるもの尚ほ多し。先生、性行端正、頗る気概あり。詩文を善くし和歌に長じ俳諧を能くし書画を識り刀劔を鑑す。晩年、東京牛込に卜居す）

安政二年に栗橋の伊坂（現久喜市）に移った。『張弛軒雑録』には「同（安政六年）八月如去年奇病流行。尤予か僑居栗橋在之邊は去年より少し」（辛巻）、「予武州栗橋駅の近村に僑居せるに、其邊にて毎年二月初午にスミツカリといへる物を調して」（癸巻）、「偖亦静女之墓は武州葛

飾郡栗橋宿より六七町西の在伊坂村にも有之。（中略）右伊坂村は予数年僑居したるか」（丑巻・明治四年）という伊坂の記事がある。明治五年には真壁に移り郷士を教化し、慷慨の士と事を議し、時には浦和県に出向き論語と孟子を講じることもあった。この頃の書簡が東京都立中央図書館の渡辺刀水旧蔵諸家書簡文庫にある。大高〔織右衛門〕宛大塩正路書簡二通である。大高は「水戸馬口労丁」住み、料紙に蒸気機関車が描かれている。即ち真壁に移った後の書簡である。ところが同文庫に木村宛正路書簡も一通所蔵されており、同じ蒸気機関車の料紙が使われているが、文中に「湯島大人態々栗橋駅迄御出」とあって、真壁に移っても栗橋には関心が続いている。この真壁は笠間藩の旧支配地であったので、正路が居をさだめたのであろう。正路も「予が常陸国真壁郡田村に住ける頃」（辰巻）の逸話を書き留めている。ただし、晩年は東京市牛込に住みそこで亡くなった。

家系については、碑文に「牧野侯重臣妣鈴木氏賢、三子あり。先生、仲なり」とあるほか『張弛軒雑録』に、

正邦は山城淀の城主稲葉丹後守也。松尾直在は通称端之助、稲葉侯の家老也。余か母方の叔父也（壬巻「霜月の末つかた松尾直在の身まかりたるをなけきて　正邦」）

とあるので淀藩の松尾直在が母方の叔父である。碑文に正路が若年荒井鳴門の門を叩いたとあるが、その理由は、荒井鳴門が淀藩の儒者であったからだと推測できる。とすれば、荒井鳴門の竹枝『浪華四時雑興百首』（文化十三年）に中島棕隠が序文を寄せているので、鳴門を通して正路は棕隠と出会ったと思われるし、鳴門は本業の儒者としても高名であったので彼を通して頼山陽に師事したとも想像できる。

また墓碑建立を記念に刊行された『張弛軒詩歌集』の漢詩編に「男刀江　大塩正和／門人　正気　小林　協／同　江南　新井義近　編輯」、和歌編には「男　大塩正和／門人　小田部正盈　同校」とあるので、子息や門人の存在が確定できる。門人については、

右の話は予壮年の頃、尾張の邊り遊歴之節、竹ヶ鼻の町人富士屋小兵衛といふ者の男子、予か門人にて有ける故、時々は富士屋へ訪ひけるに主の翁の物語。同所の事、且小兵衛も極篤実の人にて疑ふへきもなく実話故記し置ぬ。（乙巻）

という記事もあり、若き頃に尾張に遊歴したこと、その地にも門人がいたことが知られる。

「張弛軒」の号は、『礼記』「一張一弛文武之道也」に由来し、文武両道を示す言葉としてよく用いられるが、正路の場合は水戸第九代藩主の徳川斉昭の教育方針であった「一張一弛」（『偕楽園記』など）の影響を受けているのではないだろうか。『張弛軒雑録』には斉昭に触れることが多く、その大半は好意的な記しようである。例えば、

水戸中納言斉昭卿、天保十己亥年御城下に新に学校を設け弘道館と号け給ひて文武両道の諸芸学ひ所となし、大に士風を励し玉ひ、武甕槌神と孔子を祭り給ふ。

正路云、学校なれは並々の君ならは孔子のみ祭り玉ふへけれとも、武甕槌神を祭り玉ふは、流石に明君の神州を尊み給ふの意、感するも恐有り。

というような明君として斉昭を称えている記事が散見されるのである。真壁（笠間）と水戸との距離感（心理的・地勢的）は論者によって様々な捉え方があろうが、先に見た「抱尊皇大義與慷慨士議事」という姿勢や『張弛軒雑録』に見える佐幕発言、頼三樹三郎への同情の記事の多さから推測し、斉昭の影響を見ておきたい。

正路には他に『遊浦日記』（安政元年）という作品があるらしいが未見である。

2　内容

内容については、先引のように詩文、和歌、俳諧、書画、刀剣、尊皇に関する記事が多いが、時事ニュースとして御触書についての記事も目を引く。しかし、なによりも書物からの抄録が注目される。抄録の対象は冒頭に引用した「確言　事実　譬喩　儁語　天文　地理　兵法　貨財雑事」の九項目に集約できる。おもな人物を書き出して見れば（（　）内は回数）、

蜀山人（5）・齋藤竹堂・冷泉家判・冷泉為村・冷泉為則・林羅山・芭蕉・嵐雪・其角・去来・杉風・皐月平砂・頼山陽（2）・頼三樹三郎（7）・木村蒹葭堂・木下長嘯子・本居宣長（4）・武田耕雲斎・八田知紀・尾高高雅・伊能穎則・白雉・馬琴・日野資愛・鍋島閑叟・徳川慶喜（2）・徳川家茂・藤田幽谷（東湖の父　2）・藤田東湖（13）・長井雅楽・朝川善庵・中島広足（2）・中山愛親（2）・中江藤樹・中院通茂・中井竹山・細井光沢・沢庵宗彭・大高源吾・大綱宗彦・大窪詩仏・大橋訥庵・大橋卷子（訥庵の妻）・大久保忠真・大塩平八郎（2）・太田道灌・太田錦城・太宰春台。村田春海・浅田宗伯（2）・千種有功（2）・石川丈山（4）・石川雅望・徳川斉昭（13）・青山延光（2）・西行・定家・成島司直・菅茶山・菅原道真・水戸光圀（4）・神山魚貫・深草元政・新井白石・新井白蛾・松平不昧・松平康福・松平慶徳・小林文康・朱舜水・朱楽菅江・山崎景貫・鹿都部真顔・市河米庵・市河寛齋・山内豊城・山崎闇斎・山岡鉄舟（2）・野村尚房・桜井梅室・佐藤一齋・佐久間象山。高山彦九郎・孝明天皇・岩松徳純・源高門・松井幸隆・石野広通・原南陽（2）・契沖・桑原北林・熊沢蕃山・久米幹文・橘千蔭・橘守部・吉益東洞・亀田鵬斎・鬼沢大海（3）・喜多武清・関藍梁・蒲生君平・外山光親・外山光施・海上胤平・会津正志齋・賀茂季鷹・松平楽翁・家隆・荻生徂徠・榎本武揚・越智通桓・伊藤仁斎・伊藤東涯（3）・安島帯刀・清水完和・千種有文・塙忠寶・佐々木弘綱・加茂季鷹・伴信友・山内繁憲・小澤芦庵・藤井高尚・千家尊澄・能勢春臣・伴林光平・小野務・飯田年平・清水浜臣・横山由清・山東正用・清水谷公正・間宮永好・門脇重綾・長尾景寛・大津清信・富田札彦・中島宜門・小山田与清

とあって、本領の和歌や国学や漢詩関係の人物以外にも、狂歌、俳諧、洒落本、柳営連歌、絵画関係の豊富な作品が書き留められている。また辞世がら桜田門外の変を中心として幕末の時事記事も多い。

おもな書物は、

『内会連歌』（天保十二年）・『西山遺事』・『白石紳書』・『宋三家詩話』・

『孔雀楼筆記』・『秉燭譚』・『秉燭或問珍』・『春台先生　会席規條』・『楠公家訓』・『深草玄政（元政）法師庵の腰張に残るふみ』・『三秘集』・『紫草』・『野州足利郡栗野谷村復讐実記』・『近世事物考』・『武士訓』・『大和本草』・『丈山先生教訓』・『天眼通』・『続皇朝史略』・『前太平記』・『貞丈雑記』・『駿台雑話』・『日本外史』。『台湾鄭氏紀事』・『義士夜討高名咄』・『四十七士伝』・『拾芥抄』・『国語』・『関口流之伝書』・『三国志演義』・『常陸帯』・『一角纂考』・『利根川図志』・『常山紀談』・『練兵要録』・『太平秘覧』・『神社考』・『先哲像伝』・『宇治拾遺物語』・『下野国誌』・『近世叢語』・『職原抄支流』・『医事小言』・『南蛮寺興廃記』・『明史』・『回天詩史』・『五雑組』・『源平盛衰記』・『明倫歌集』・『埼玉縣地誌略鈔録』・『仏道大意』・『観光社同盟帳』・『和語圓機活法』・『苔清水』・『萬国新話』・『論農』・『古今集遠鏡』・『関城詩歌』・『百人一首拾穂抄』・『雅言解』・『古今和歌六帖』・『言葉の玉緒』・『蝦夷葉那誌起元』・『三玉桃事抄』・『近世三百人一首』・『東京大家十四家集評論』・『開化新題歌集』・『東京日日新聞』

などである。すべてが彼の蔵書であるとは言えないにしても相当の蔵書家であったことは間違いない。書物の情報としては戊巻に「嘉永七甲寅年六月金花堂にて求之書籍價」の記事、すなわち右のように嘉永七年に正路が江戸日本橋の金花堂（須原屋佐助）で求めた書物とその値段が書き留められている（〈　〉内は値段）。

『唐詩選掌故』四冊〈銀八匁〉・『和漢名数』三冊〈銀四匁八分〉・『女大学』壱冊〈銀三匁〉・『古今集』二冊〈銀六匁〉・『先哲叢談』四冊〈銀十三匁〉・『鶉衣』四冊〈銀十三匁五分〉・『増補古言梯』完〈銀五匁〉・『秋の寝覚』三冊〈銀十四匁〉・『南畝莠言』二冊〈銀四匁〉・『新刻文選正文』十三冊〈銀三十四匁〉・『史記』五十冊　紅屋板　紙板極上〈金二両三分二朱〉・『詩語玉屑』五冊〈銀八匁五分〉・『古文全集』完〈銀三匁八分〉・『駿台雑話』五冊〈銀十四匁五分〉・『説苑纂注』十冊〈銀三十匁〉・『佩文齋　詠物詩選』横本二冊〈銀十匁〉・『養生訓』四冊〈銀七匁〉・『大和本草』廿壱巻〈銀廿八匁〉・『孝経大義』壱巻〈二匁〉・『草字彙』十二巻〈銀廿壱匁五分〉・『標箋孔子家語』五巻〈銀十四匁五分〉・『新序纂注』四冊〈銀十二匁五分〉・『陸放翁詩鈔』四冊〈九匁五分〉・『俳諧奇人談』前後六冊〈銀十匁〉・『古文真宝』二冊〈銀四匁五分〉・『国語定本』〈銀廿壱匁五分〉・『増注聯珠詩格』十冊〈銀十九匁〉・『清新詩題』小二冊〈銀壱匁五分〉

『史記評林』にわざわざ「紅屋版」（しかも高価）の注記があるのも注意しておくべきであろう。またここで購入された書物名が『張弛軒雑録』に抄録されていないものが多い。当然ながら『張弛軒雑録』は彼の読書ノートではなく、読んだ書物がすべて記載されているわけではないのである。となると、大塩正路の蔵書はそれなりの規模であったと思われるが、散逸したようでその全容を知る手がかりがない。真壁や伊坂の読書人の姿は想像するしかないのかもしれない。

3　雙峰自作に見る本音

大塩正路は和歌と漢詩とをもって世に聞こえ、詩集十四巻と歌集六巻があり、没後にその一部が『張弛軒詩歌集』として纏められたことは既述の通りである。しかしながら、『張弛軒雑録』には他人の漢詩や和歌

は多く書き留められるも正路の作品は記されない。代わりに雙峰の名での戯文が記されている。また連歌や俳諧、狂歌の記事も多く、『張弛軒詩歌集』とは大きな隔たりがある。文武両道を謳う張弛軒の名が似合うのは「詩歌集」の方であって、この「雑録」はその理念外なのである。そのことから、むしろ「雑録」の方が彼の本音の吐露とも見ることができる。以下に紹介したい。

天保十四癸卯年御改年九月戯吟　雙峰自作

物換り移れはおかじ秋の月
　三大橋の静かなる月
良寒く組合仲間なくなりて
　看板迄も改るなり
店賃も地代も少し引下し
　奢の品のならぬ厳しさ
あちこちに親孝行の顕はる、
　立寄て見る度々のはり札
喩してもこりぬ憎さに地獄変
　女　髪　結　女　浄　瑠　璃
軍談に客寄場所の定まりて
　富興行はひつたりとやむ
酒の直の賤きを雪にいひ出し
　船の蘆はおろされぬなり
不如法な僧罰するも慈悲心
　昔のかたに直す田畑
月花のすんと寂れる白鴎
　所替りて春の狂言
料理屋に長閑な三味の音もせす
　新吉原はく、つ溢る、
棄捐にて古き手形の益たらす
　縮緬麩は仕舞置なり
武はつたるなりも半は名聞に
　海邊の備乱を忘れす
人別に何やらかやら六かしく
　耕作の世話届く牛馬
評判な石の鳥居の出来もよく
　ますくたけの延る沢瀉
広沼を埋めかけたる夏の月
　智恵を互にきそふ大名
美しき冶郎をみんな追払ひ
　商売かへてつらき借金
領分を取上らるゝ迷惑さ
　きのふにけふと定らぬ触
久しふり日光山の花盛り
　麓に友のこそる修験者

天保の改革が終焉を迎えた天保十四年の棄捐令、御免富の乱立による富札興行の廃止、新吉原の傀儡、海辺防衛などの時事を連句で読み込んでいる（丙巻）。

正路は俳諧に明るく、俳人との交渉もあったらしく、

大海長江鱗介甚た蕃し。或はつり、或は綱し、是を得て鱠に宜きあり、炙に可なるあり。世に行はるゝ俳諧の発句、鱗介のしけきかことし。そか中に人口に膾炙するもの少からす。利根川の邊りなる龜齢の家に寓せる白薙生よく風流の郷に遊ひ、広く四方に求め、人口に膾炙する秀句を集め、一巻になさんとて序を余に乞ふ。余その志の雅ひなるを感し、ために一筌を挈け香を羨ふの情を顕はす爾已。

辛亥春日　　雙峰述

という記事がある（丁巻）。辛亥（嘉永四年）に利根川の亀齢の家に寓居していた白薙が人口に膾炙する俳諧発句の集成・編輯を企て、その序文を雙峰こと正路に依頼したことが知られる。亀齢は二村博「芭蕉百回忌と常陸茨城郡の俳諧（上）―佐久間青郊著『三百六十日々記』を通じて」に見える安居の亀齢であろうか。[2] 白薙については正路が、

右は栗橋駅板や荘兵衛方へつかへ居る茂吉（白薙也）といふもの、ふかく俳諧を好み諸家の句を集めて一巻をなさんとて序を乞故、誌して与へぬ。

と記すので、栗橋の俳人であったと思われる。栗橋から笠間、そして常陸俳壇と正路の関係については今後の課題としたいが、管見の限りでは白薙という俳人、彼の編輯した俳諧撰集の存在は確認できなかった。ご教示を賜りたく思う。

4　抄録

以下、正路が書き留めたものから漢詩や和歌以外、狂歌や俳諧などからいくつか抜き出してみる。

丁の巻には図版2のような蜀山人の文が抄録されている。「小判六十目」などが大字で書かれているのだが、このちらし書きは原本の『万紫千紅』（文化十五年刊）の記載を模しているのである。単に文章だけを抄録すればよいのだが、極力原本の遊び心を書き留めているのである。これは南敏ファンに共通する性向である。同様に『利根川図志』から「海獺（アシカ）」の図を模写している（壬巻　図版3）。絵心はあったらしく、彩色を施した「日光強飯之図」（癸巻　図版4）もそれなりに書けている。

俳諧の抄録も多いが、一例を挙げれば、

恩を仇にて報す　嵐雪
手にかりた垣根を倒す糸瓜かな
仇を恩にて報す　其角
手折れた人に薫るや梅花
如是我聞　去来
稲妻や二度目に渡る丸木橋

という発句を書き留めている。

俳諧と演劇、中国戯曲をからませた記事も乙巻に見える。

清国之先帝對聯の文に「日月ヲ燈トシ、江海ヲ油トシ、風雷ヲ鼓板トス。天地第一番ノ劇場、堯舜ヲ旦（ヲンナガタ）トシ、文武ヲ末（タチヤク）トシ、莽操ヲ中浄（ジツアク）トス。古今来許多ノ脚色（シクミ）」と、此大記号（ナダイ）をあくれは、日本天竺の評判師「東西々々」と声をかけて、

月雪や隣の座には釈迦如来　　皐月平沙

これは人口に膾炙していた康熙帝聯句、明清劇曲の役名に皐月平沙（皐月平砂）の句を取り合わせた戯文である。また林子平の亡霊が塩竈明神の託宣にみせかけたとする風刺の狂詩がある。

世間馬鹿誰第一　蘭医小僧溺英吉　曽作愚文称献芹　大言一向虚無実
何知王道有淵源　皇統綿々幾千春　身生皇国心帰賊　馬乎鹿乎彼何人
漫称外国風教好　其奈追年働乱暴
君不見　百千万歳　祖宗恩　彼馬鹿輩何以報
右狂詩一篇不知何人作。或云林子平亡霊作之。或云是塩竈明神託宣也。

先述したように。正路は若年荒井鳴門と中島棕隠に師事しているが、彼らは竹枝のような正統漢文からはずれた文芸も好んでいた。鳴門は竹枝について「軽佻婬靡」と断りながらも『浪華四時雑興百首』を編んだのであった。正路も漢詩を正面に据えながらも、両先生の薫陶宜しく狂詩にも関心があったのであろう。

その他、戊巻には「蝦夷方言譯略」としてノボリ（山岳）・アトイ（海）・レフン（沖）・トウ（湖沼）・ベツ／ブツ（川河）・ナイ（水沢）・モシリ／ムシリ（島嶼）・ワタラ（岩石）・コタン（村落）などの語が抄録されている。

以上、あらあらと女子大所蔵の『張弛軒雑録』を紹介したが、本稿で取り上げたのは紙幅の関係上ほんの一部にとどまる。文武両道を信条として、徳川斉昭にシンパシーを感じながら和歌、漢詩のみならず俳諧や狂歌、狂詩などにも興味を有していた読書人である。当時の栗橋や真壁に関する記事も散見する。旧笠間藩時習館で学び、栗橋伊坂、真壁で門弟を教え文武に励み、東京市で没した幕末から明治の激動期を生きた読書人の雑記として今後活用されることを願っている。

本稿はＪＳＰＳ科研費ＪＰ18H00647（代表：前田雅之）の助成を受けたものである。本稿をなすにあたり、桜川市教育委員会文化財課、久喜市教育委員会文化財保護課、埼玉県文書館のご協力をいただいたことを末筆ながら感謝します。

【注】

（1）二村博「芭蕉百回忌と常陸茨城郡の俳諧（上）―佐久間青郊著『三百六十日々記』を通じて」（『常磐大学人間科学部紀要　人間科学』、第33巻　第1号（２０１５年９月）

【図版1】表紙

【図版2】蜀山人

【図版3】アシカ

【図版4】日光強飯之図